

おほきおとゞ、そのかみ夢見給へることありて、源氏の中將わらはやみやまじなひ給ひし北山の
 ほとりに、世にしらすゆゝしき御堂をたて、名をば西園寺といふゆり、この所は、伯三位すけな
 がの領なりしを、をはりの國松えだといふ莊にかへ給ひてけり、もとは田はたけなせおほくて、
 ひたぶるにぬ中めきたりしを、さらにうちかへしくづして、えんなるそのにつくりなし、山のた
 たすまひ木ふかく、池の心ゆたかにわたつ海をたへ、峰よりおつるたきのひつきも、げに涙も
 よほしぬべく、心ばせふかき所のさまなり、略中 北のまんでんにぞおとゞはすみ給ふ、めぐれる
 山のときは木どもいとふりたるに、なつかしきはどのわか木のさくらなせうゑわたすとて、お
 とゞうそぶき給ひける、

山ざくらみねにもをにもうゑおかむ見ぬ世の春を人やしのぶと、かの法成寺をのみこそい
 みじきためしに世繼のいひためれど、これはなほ山のけしきさへおもしらく、都ばきれて眺望
 そひたれば、いはんかたなくめでたし、藤原峰殿道家の御まうと、あづまの將軍頼朝の御おほぢに
 て、よろづ世の中御心のまゝに、あかぬ事なくゆゝしくなんおはしける、いまの右のおとゞをさ
 をさおとり給はず、世のおもしにて、いとやんごとなくおはするときこゆる、おくゆかしき御は
 せなるべし、略中 まことやこぞより中宮子結はいつしかたゞならずおはします、六月になりて
 その程ちかければ、十三社のほうへい勅使たてまつらる、略中 後の宮いとくるしげにし給ひて、
 ひたけゆくにいろうゝの御物のけどもなのりいで、いみじうかしかまし、おとゞ氏實きたの
 かたいかさまにと御心をまひて、おぼしなげくさまあはれにかなし、略中 内には更衣ばらに若
 宮二所おはしますと、此御事をまぢ聞え給ふとて、坊さだまり給はぬほどなり、たとひたひらか
 におはしますとも、もし女御子ならばとまがくしきあらまは、かねておもふだにむねつふ
 れてくちをし、かつは我御身のまゆくせ見ゆべきさはぞかしておぼして、おとゞもいみじうね